

視点

健全な生態系があって 健全な社会が成立する

(財)埼玉県生態系保護協会会長 池谷 奉文



昨年春、ドイツの最大手の自動車メーカーであるフォルクスワーゲン社の本社を訪れ、社の経営方針についていろいろと意見交換をした時に、本社役員から素晴らしい発言がありましたのでご紹介します。フォルクスワーゲン社曰く、「健全な生態系があってはじめて、健全な社会ができます。我が社も社会の一員ですから、生態系を守るのは義務だと考えています。自然の生態系が崩壊すれば健全な経済を保つことはできず、企業経営も成り立ちません。例えば、我が社で日々大量に使用する水も、自然の生態系の恩恵のひとつであり、水が枯渇すれば、それ自体が経営リスクになります」とのことでした。こうしたことを受けて、フォルクスワーゲン社では、自社が及ぼしている自然の生態系へ悪影響を自覚し、自然の生態系を守る努力を進めています。具体的には、敷地内でのビオトープ化はもとより、本社がある地域において行政や環境NGOと連携をして、土地を購入し、地域の自然の再生に積極的に取り組んでいました。

私どもの協会では、このように、毎年海外へ赴き、世界各国の政府や企業、研究者と意見交換を行っています。これは、現在世界が進めている持続可能なくにづくりを日本に紹介するために行っているものです。そうしたなかで、近年、たいへん気になることがあります。それは、日本の評価が国際社会の中で大きく下がりつつあることです。その理由は、戦後より進めてきた、日本の誤ったくにづくりにあると考えます。目先の経済発展のみに重きを置き、将来世代の人々のことを考えたくにづくりを行ってこなかったことに問題があります。くにづくりの長期的なビジョンを持たず、長い時間をかけて培われてきた自然

の生態系や歴史的な文化、伝統を軽んじていることが、国際社会の信用に陰を落としているのです。日本人の心の乱れと美しくないまちなみを見ればよくわかることです。

日本と同様に、敗戦という状況から復興してきた国にドイツがあります。この国は、面的にも、国民性でも、日本にとっても似ています。しかし、くにづくりの進め方は明らかに異なっています。ドイツは、人と自然、伝統が共存する美しくくにづくりを目指すというしっかりとした哲学を持っています。ドイツを訪れ、自然や歴史的な建造物を多く残した美しいまちなみに感動された方も多いのではないのでしょうか。これらは、まさにこのくにづくりの哲学を持って、50～100年先を見据えて計画的に取り組んできた努力の賜と言えます。

振り返ってみますと、日本にも素晴らしい自然の生態系や伝統がありました。しかし、日本は自ら生態系と伝統を壊してきてしまいました。世界に誇れる、最も大切なこうした財産を生かしたくにづくりを行うことこそ、国際社会の信用を高めると共に、将来にわたり日本の経済を安定させることにもつながっていきます。このことは、埼玉県の社会づくりに当ても当てはまります。今や、県内に本来あった健全な自然の生態系は、県土の約7.2%しかありません。そうしたことから、私たちの協会では、豊かな自然のシンボルであった、コウノトリやトキが舞う埼玉県を再生することが全国に誇れる持続可能なくにづくりにつながらんと考え、現在、実現に向けて積極的な活動を展開しています。

今、私たちには、フォルクスワーゲン社のように、社会の一員としての自覚と哲学を持ち行動することが求められています。